

## 【漁況】

### [マアジ]

#### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成21年は16万5千トンとなりました。

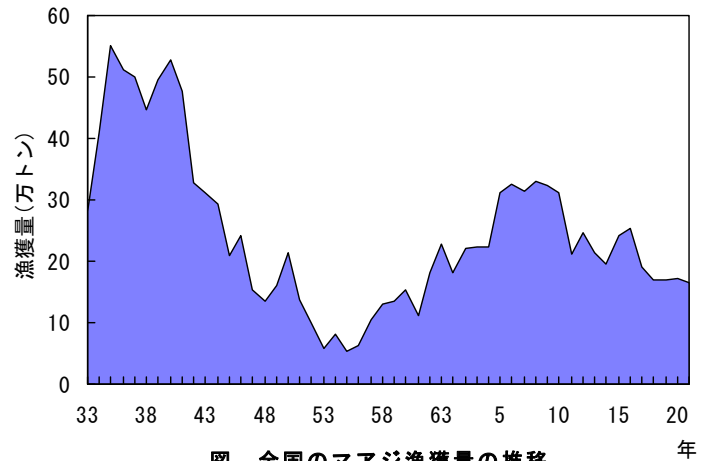


図 全国のマアジ漁獲量の推移

#### 2. 平成 23 年 4～6 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、牛深沖、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、マアジ豆、小（1 歳魚：平成 22 年生まれ）主体に 493 トンの水揚げがあり、前年の 80 % 及び平年の 102 % となりました。

#### 3. 平成 23 年 7～9 月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ仔（0 歳魚：平成 23 年生まれ）、マアジ豆、小（1 歳魚：平成 22 年生まれ）となるでしょう。

来遊量は、前年を上回り、平年並になるでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲主体となるマアジ 0 歳魚は、定置網への混獲が順調に推移していることから、前年を上回り、平年並になると考えられます。マアジ 1 歳魚は、これまでの漁況から前年を下回り、平年並みになると考えられます。

総合的に判断すると、前年を上回り、平年並になると考えられます。

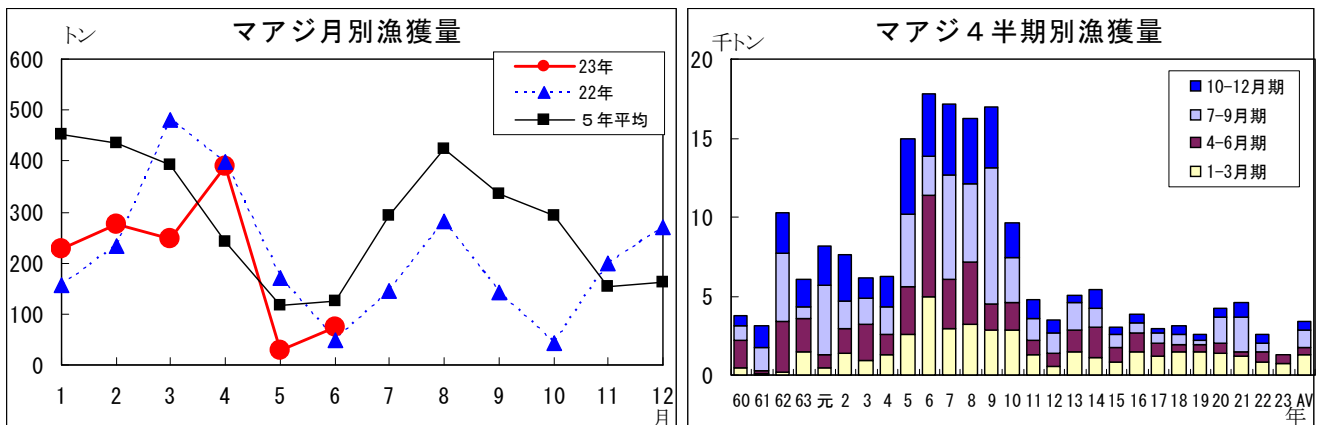


図 マアジまき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値（AV）、平成 23 年 6 月 22 日までの水揚量を使用。

## [サバ類]

### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンとなりました。平成17年から再び増加し平成21年は47万1千トンとなりました。

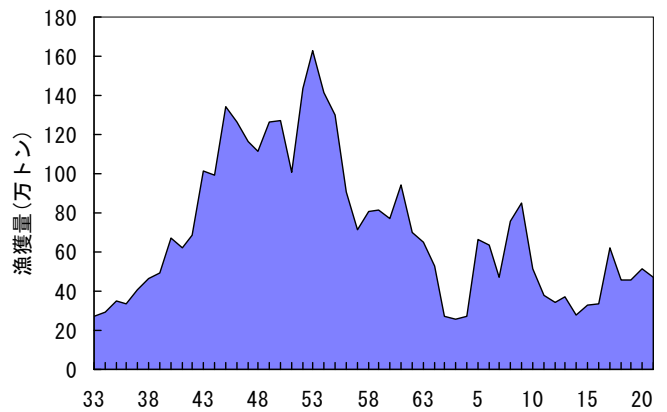


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

### 2. 平成 23 年 4～6 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、縄瀬沖、甌島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、種子島東、種子島北に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、北薩海域でサバ仔(マサバ・ゴマサバ混じり、0 歳魚：平成 23 年生まれ)主体、薩南海域ではゴマサバ中小、中(2 歳魚：平成 21 年生まれ)主体に 6,750 トンの水揚げで、前年の 176 % 及び平年の 134 % と好調に推移しました。

### 3. 平成 23 年 7～9 月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中小、中(2 歳魚：平成 21 年生まれ)となるでしょう。

来遊量は前年並で、平年を上回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

ゴマサバ 0 歳魚は、既に漁獲加入していることから今期も他の魚種に混獲される考えられます。ゴマサバ 1 歳魚は、加入状況が平均的であることから、来遊量が少なく前年を大きく下回りますが、ゴマサバ 2 歳魚は、加入豊度が高い年級群で今期も漁獲の主体として来遊し前年を上回ると考えられます。その結果、前年並で、平年を上回ると考えられます。ゴマサバ 3 歳魚以上は、来遊する期間ではなく若干混じる程度と考えられます。

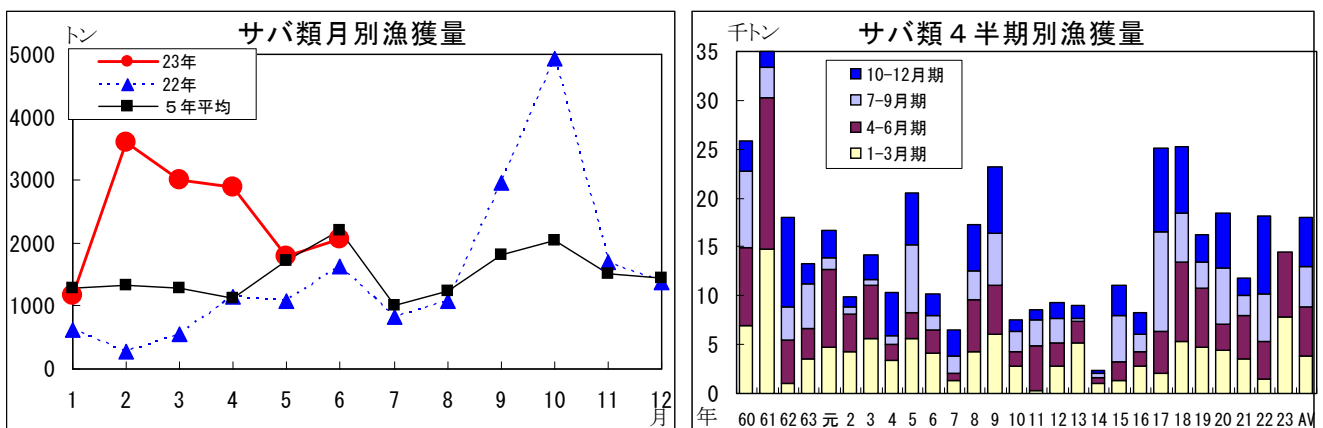


図 サバ類まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年(平成 18～22 年)の平均値(AV)、平成 23 年 6 月 22 日までの水揚量を使用。

## [マルアジ（アオアジ）]

### 1. 漁獲量の動向（水産技術開発センター調べ）

マルアジの漁獲量は、昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しました。平成 16 年以降は低調に推移し、21 年は過去最低の 94 トンとなりましたが、22 年は増加し平年並みの 371 トンとなりました。

### 2. 平成 23 年 4～6 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

まとまった来遊はなく、期全体で 32 トンの水揚げで、前年の 23 % 及び平年の 33 % と低調に推移しました。

### 3. 平成 23 年 7～9 月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ豆（1 歳魚：平成 22 年生まれ）でしょう。

来遊量は前年並で、平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

マルアジの来遊は、低調に推移していることから低水準の前年並みと考えられます。

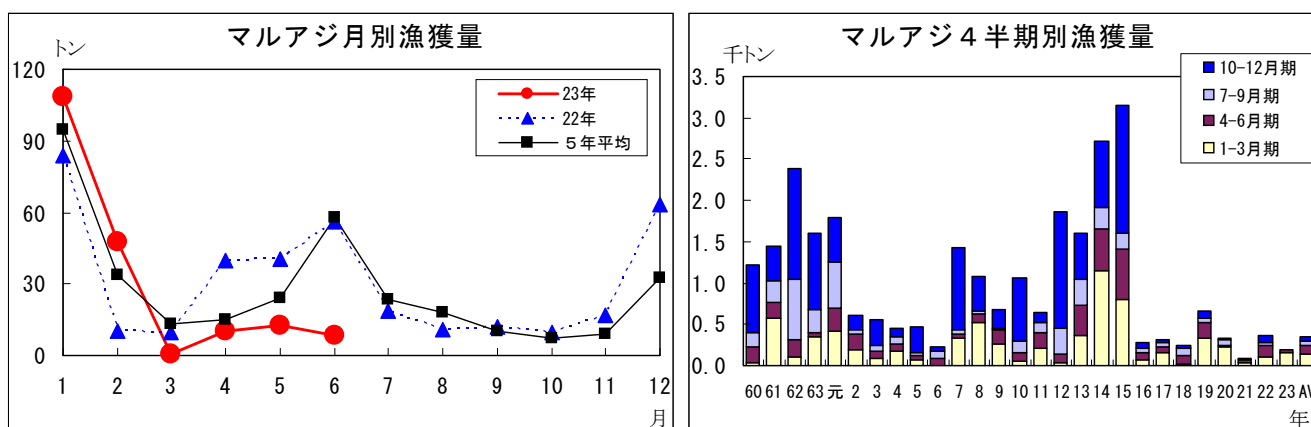


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値(AV)，平成 23 年 6 月 22 日までの水揚げ量を使用。

# [マイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。

その後さらに減少し平成14年は5万トンとなり、以降横ばい傾向で平成21年は5万7千トンとなっています。

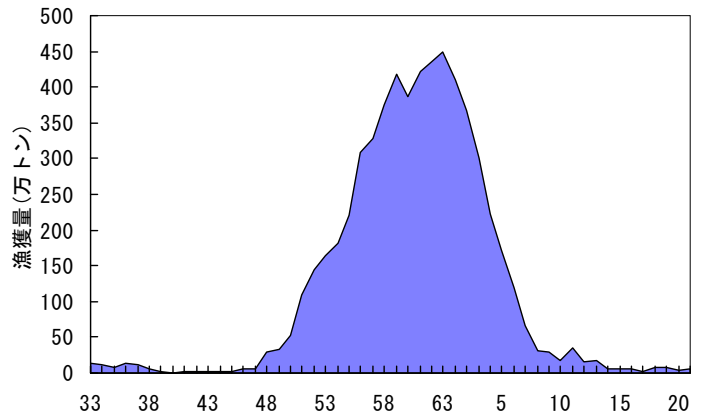


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

## 2. 平成 23 年 4～6 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では牛深沖，縄瀬沖，甕島東で漁場が形成されました。

薩南海域では漁場が形成されませんでした。

北薩海域の棒受網では，川内沖～阿久根沖にかけて漁場が形成されました。

4 港計のまき網では，中羽(1 歳魚：平成 22 年生まれ)主体に 1,818 トンの水揚げで前年の約 3,400 倍，平年の約 8 倍と好調に推移しました。

北薩海域の棒受網は，小羽(0 歳魚：平成 23 年生まれ)主体に 323 トンの水揚げで前年の約 32 倍，平年の約 46 倍と好調に推移しました。

## 3. 平成 23 年 7～9 月期の見とおし

漁獲の主体は，小羽(0 歳魚：平成 23 年生まれ)でしょう。

来遊量は前年，平年を上回るでしょう。

(根 拠)

漁獲の主体と来遊量は，現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は棒受網で漁獲されていた小羽がまき網の漁獲対象になると考えられます。棒受網が非常に好調に推移したことから前年，平年を上回ると考えられます。

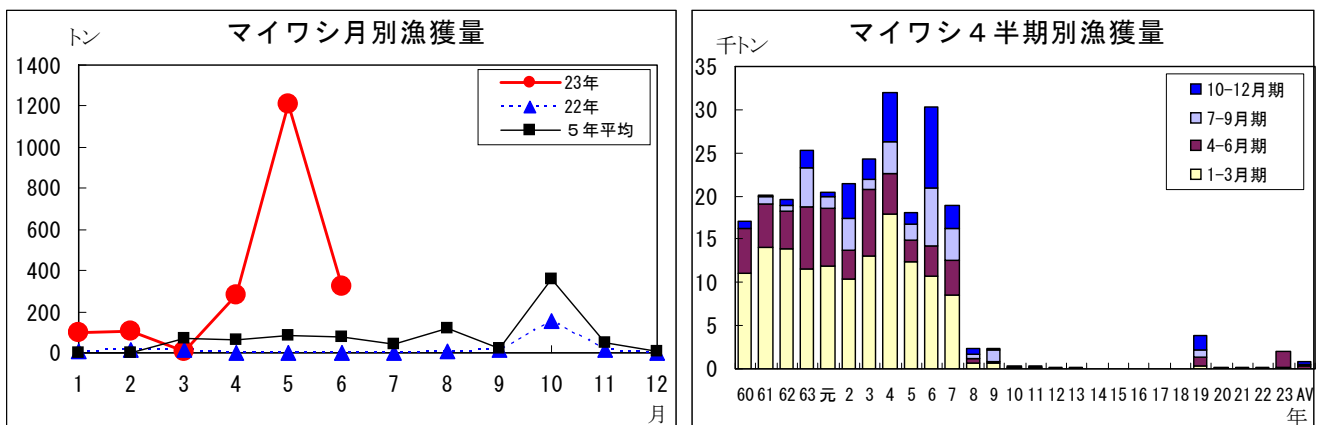


図 マイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値(AV)，平成 23 年 6 月 22 日までの水揚量を使用。

# [ウルメイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりました。その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。その後減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりましたが、近年は増加傾向となり、平成21年は5万4千トンでした。

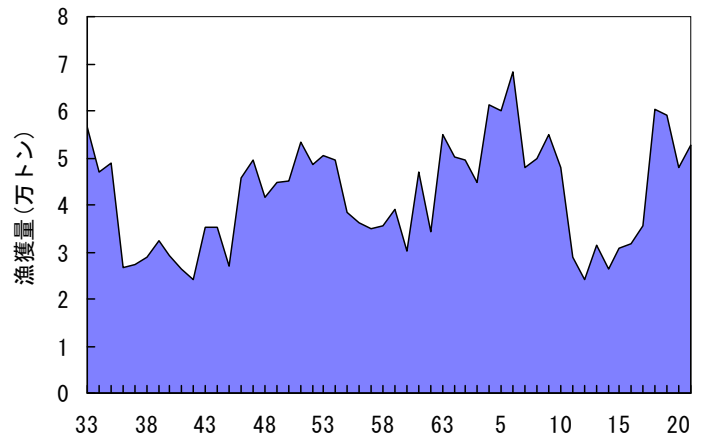


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

## 2. 平成 23 年 4～6 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、縄瀬沖、甕島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、種子島北、開聞沖、枕崎沖に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、中羽(1 歳魚：平成 22 年生まれ)主体に 819 トンの水揚げがあり、前年の 105 %、平年の 109 %となりました。

北薩海域の棒受網では、中羽(1 歳魚：平成 22 年生まれ)主体に 67 トンの水揚げがあり前年の 31 %、平年の 43 %となりました。

## 3. 平成 23 年 7～9 月期の見とおし

漁獲の主体は、小羽(0 歳魚・平成 23 年生まれ)になるでしょう。

来遊量は前年を上回って、平年並になるでしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、0 歳魚(平成 23 年生まれ)主体の来遊となります。0 歳魚は、これまでの定置網への混獲や棒受網の聞き取りから、比較的好調な加入があったと考えられるので、前年を上回る来遊が見込まれます。

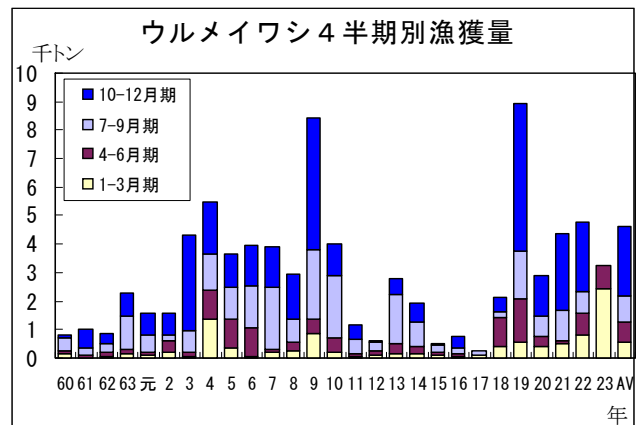
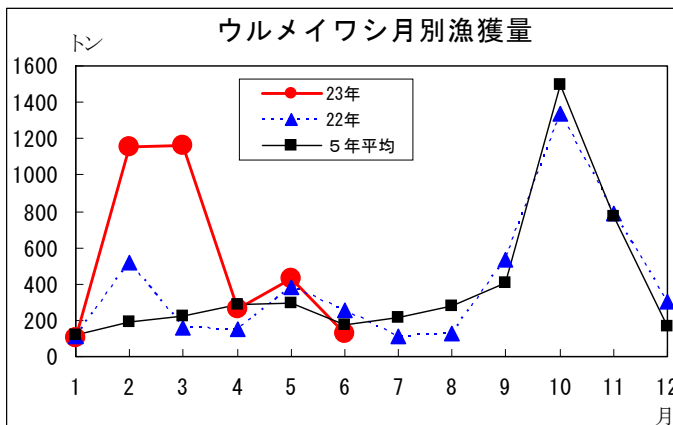


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値(AV)、平成 23 年 6 月 22 日までの水揚量を使用。

# [カタクチイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成21年は34万5千トンとなりました。

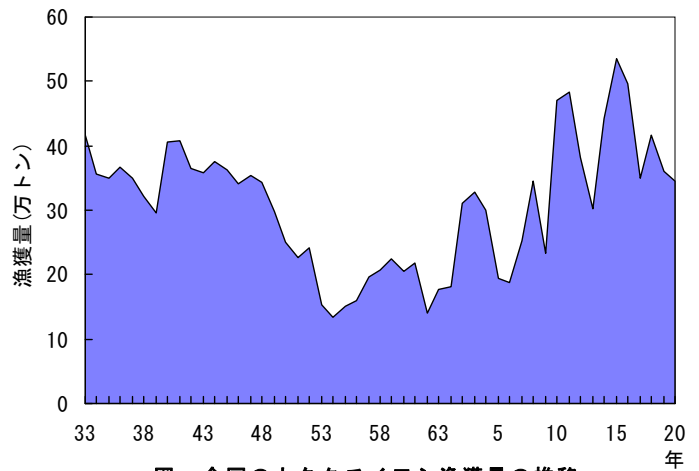


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

## 2. 平成23年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域の長島，阿久根沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では549トン（前年比100%，平年比129%）と前年並で平年を上回り，北薩海域の棒受網では179トン（前年比64%，平年比76%）と，前年・平年を下回りました。

## 3. 平成23年7～9月期の見とおし

期間の前半は小～中羽（0歳魚・平成23年生まれ）と大羽（1歳魚・平成22年生まれ）が漁獲の主体で，後半は中羽～大羽（0歳魚・平成23年生まれ，1歳魚・平成22年生まれ）が漁獲の主体となり，前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

前期の後半の漁況から，7～9月期の来遊は前年・平年を下回ると考えられます。

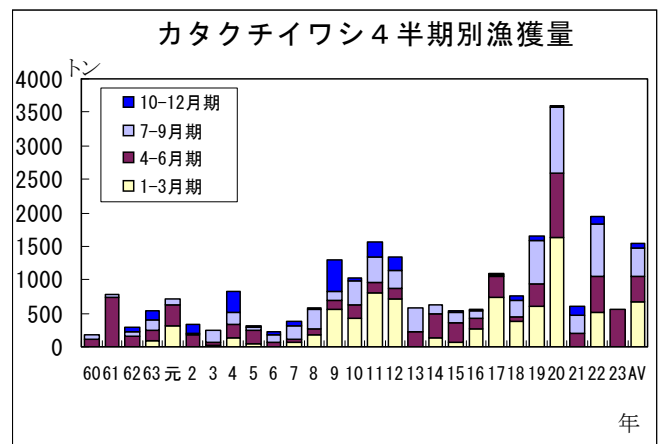
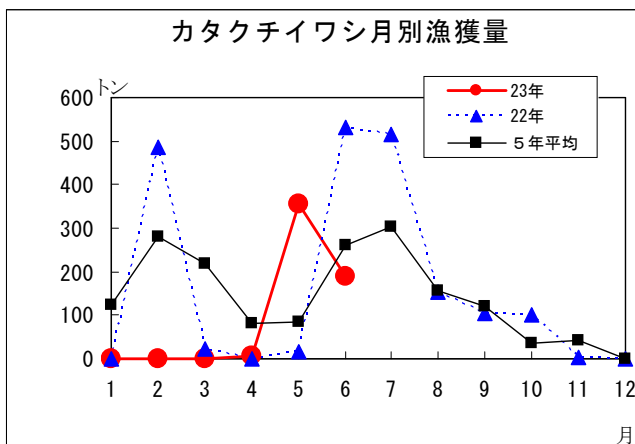


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成18～22年）の平均値（AV），平成23年6月22日までの水揚量を使用。

## [シラス]

### 1. 経年経過及び平成 23 年 4～5 月期の漁況の経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14, 15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが、平成 17 年以降減少傾向を示し、平成 21 年は 1,771 トンまで減少しましたが、平成 22 年は 2,133 トンに増加しました。

志布志湾海域では平成 12 年の 1,407 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14 年は 396 トンまで減少しました。その後平成 15 年以降は増加傾向を示し、平成 19 年は 2,374 トンと好調に推移しましたが、平成 21 年は 871 トンまで減少しましたが、平成 22 年は 1,100 トンに増加しました。

今期の西薩海域はカタクチシラス主体に 783 トンの水揚げで、前年の 45 %、平年の 59 %と前年・平年を下回りました。

志布志湾海域ではカタクチシラス主体に 257 トンの水揚げで、前年の 47 %、平年の 52 %と前年・平年を下回りました。

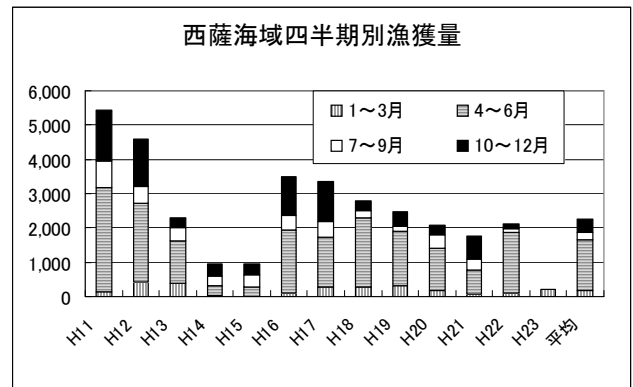
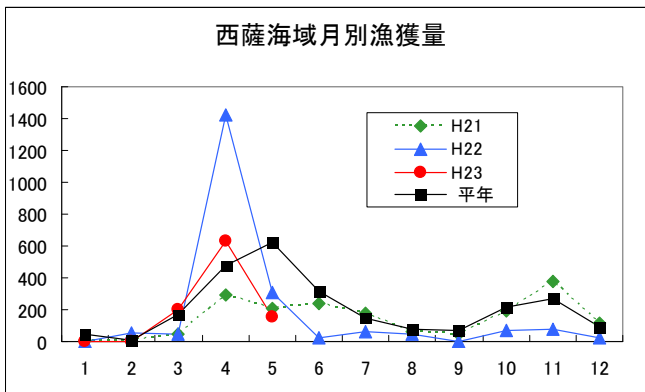


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

※平年値は過去 5 年(平成 18～22 年)の平均値(AV)、平成 23 年 5 月末までの水揚げ量を使用。

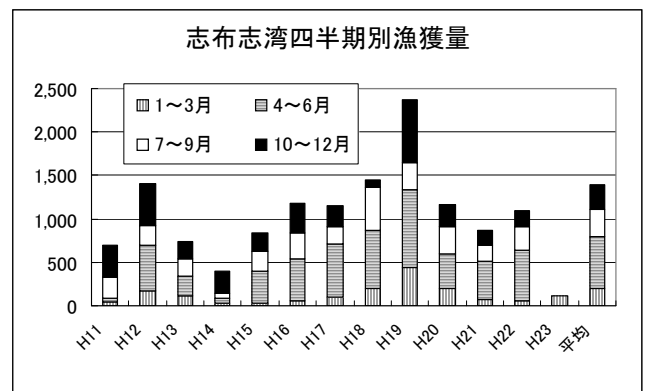
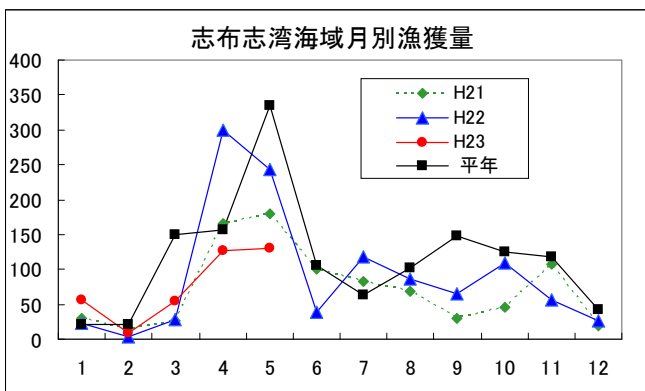


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

※平年値は過去 5 年(平成 18～22 年)の平均値(AV)、平成 23 年 5 月末までの水揚げ量を使用。

# [イワシ類参考資料]

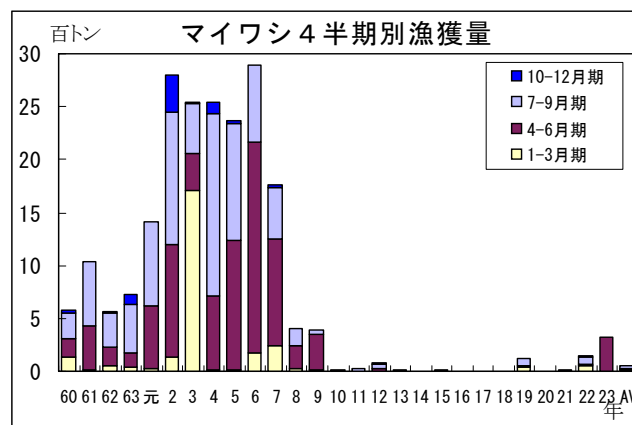
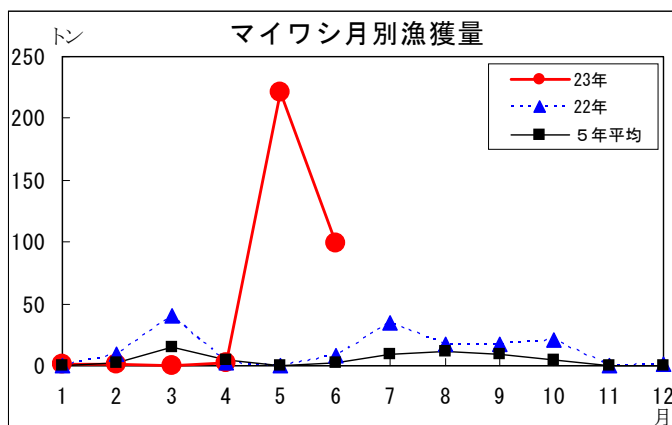


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

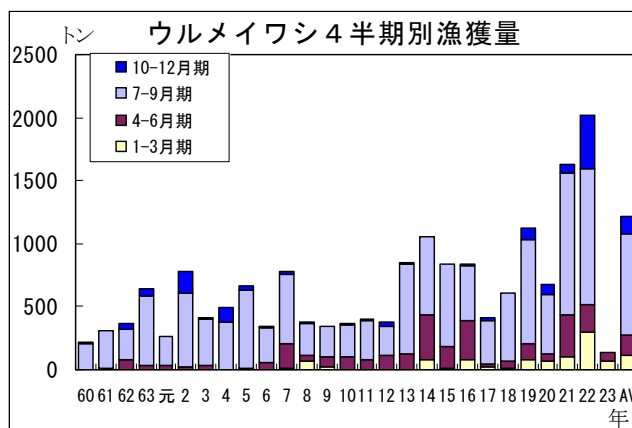
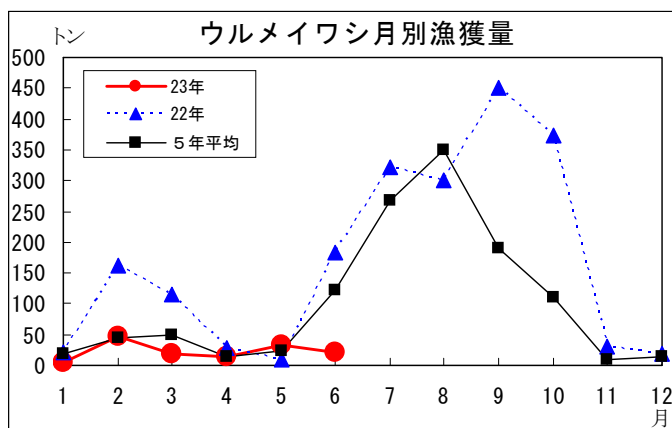


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

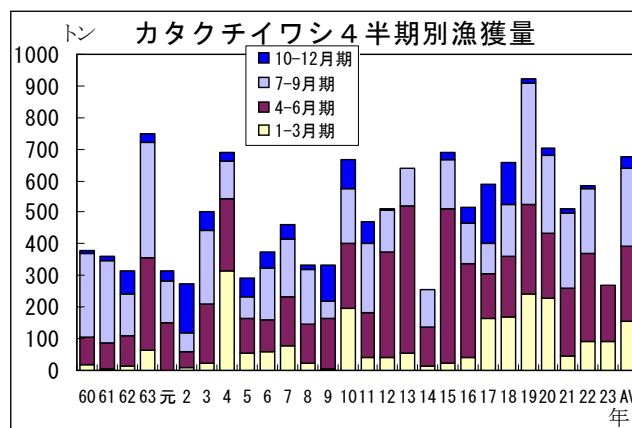
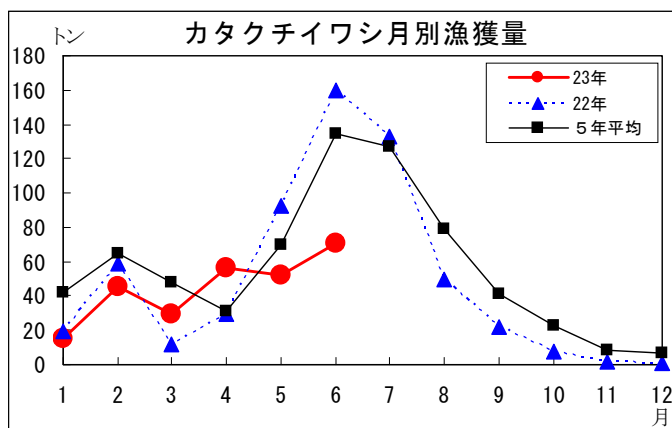


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年(平成18~22年)の平均値(AV),平成23年6月22日までの水揚量を使用。



## [参考：漁況経過のみ記載]

### 〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（4港計）〉

#### 1. 経年変化及び平成23年4～6月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成22年は2,185トンとなりここ5年間横ばいとなりました。

平成23年4～6月は、薩南海域では、平瀬でクサヤモロ中小、種子島北、種子島東、種子島南でモロ小の漁場が形成されました。期全体で1,224トンの水揚げで、前年の約39倍及び平年の約11倍と好調な来遊となりました。

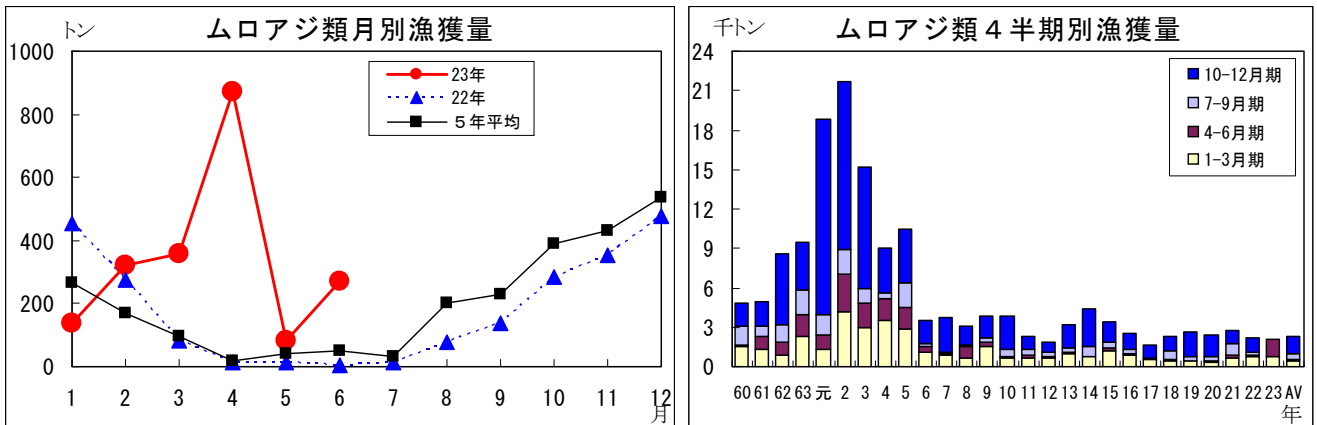


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成18～22年)の平均値(AV)、平成23年6月22日までの水揚量を使用。

### 〈オアカムロ（4港計）〉

#### 1. 経年変化及び平成23年4～6月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと一旦増加しましたが、再び減少傾向で平成22年は882トンとなりました。

平成23年4～6月は、薩南海域では屋久新曾根に漁場が形成されました。期全体で412トンの水揚げで前年の179%及び平年の234%となりました。

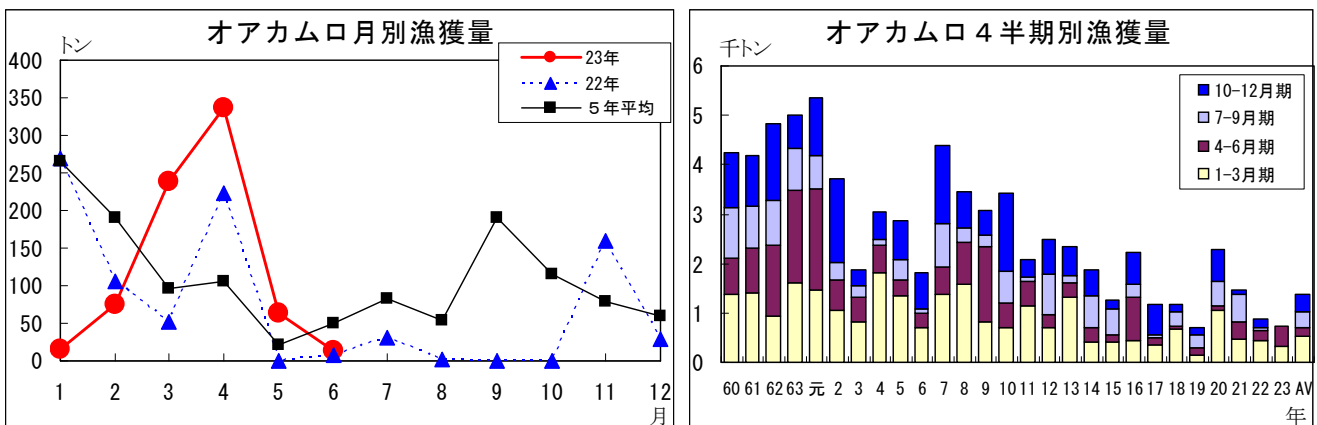


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成18～22年)の平均値(AV)、平成23年6月22日までの水揚量を使用。